

# Forex

株式会社 ジャパン  
エコノミックパルス  
〒103-0007  
東京都中央区日本橋浜町  
2-33-5  
Tel 03-5962-3910  
Fax 03-5962-3913  
www.j-pulse.co.jp  
info@j-pulse.info

# Market Insight

2023年6月19日（月）

## 全般的な円安の持続と過熱調整にらむ

### FRB議長証言、米日指標、英中銀会合など焦点

今週の為替相場は全般的な円安と外貨高について、持続余地と過熱調整的な円高をにらんだ展開が想定される。週間予想はドル/円が140.20-142.80円、ユーロ/円は151.60-156.70円。前週は米FRBがFOMCで利上げを見送ったものの、今後の利上げ継続を示唆し、ドルがサポートされた。ECBは理事会で利上げ実施と利上げ継続姿勢を示し、ユーロ高が進展。かたや日銀は政策会合で緩和維持を決め、円安地合いが維持されている。今週はFRB議長の議会証言や米日の指標、英中銀会合などが焦点になる。

### 米10年債金利、13・26・52週線が上向き持続

今週の為替相場で注目されるのは、米FRBのパウエルFRB議長による議会証言だ。21日に下院金融委員会、翌22日に上院銀行委員会それぞれ半期に1度の議会証言が行われる。

前週のFRBによるFOMCでは、昨年からの利上げの累積効果や3月以降の金融不安の影響を見極める意味合いもあり、利上げが見送られた。一方、同時に発表された参加メンバーによるドット・プロット（金利予測分布図）では、政策金利FFが中央値で年末までに5.6%に上昇するとの予想が示されている。3月時点の予測（5.1%）から引き上げられたことなどもあり、残り2回の利上げ観測が浮上。為替相場ではドル高の要因となっている。

今週の議長証言では、改めてインフレ警戒姿勢の堅持や残り2回を含めた利上げ余地が示唆されると、ドル高の流れが維持されそうだ。直近の米国経済についてはNY連銀が16日公表した内部分析モデルに基づく最新見通しで、今年の米成長率が3月時予想の+0.2%から+1.0%に上方修正された。FRBが重要視しているインフレ指標、コアPCEデフレーター（個人消費支出の物価指数）の前年比上昇率予想も、+3.5%から+3.7%に引き上げられている。

一方、FRB議長の議会証言では、議員から「利上げ加速に伴う先行き雇用の悪化リスク」や「利上げ余波としての銀行不安の先行き拡大リスク」などへの質問が想定される。こうした利上げ打撃問題について、パウエル氏が重視する姿勢を示すと、先行き利上げ停止や利下げの思惑を喚起。為替相場では、短期調整的なドル安となる可能性が無視できない。

また、米国では株価が6月から再上昇となり、前週FOMCで残り2回の利上げが示唆されても底堅さが維持されていた。こうした株式市場の楽観論は、FRBによるインフレ押し下げ策には障害となる。米国のインフレに関しては、米金融大手ゴールドマン・サックスのストラテジストが16日、顧客向けレポートで「市場が現在織り込むほど迅速には低下しないだろう」と警告を発している（ブルームバーグが紹介）。

こうした状況もあり、パウエル氏が議長証言で米株市場の楽観論を牽制するような利上げ継続姿勢（タカ派）をアピールする可能性も残されている。その場合、米国株が下落となり、日本株も高値警戒感による下落へと作用。為替相場で

**WARNING!** 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパン  
エコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送  
は法的に罰せられますのでご注意ください。



〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル  
TEL (03) 5962-3910 FAX (03) 5962-3913  
E-Mail info@j-pulse.co.jp URL http://www.j-pulse.co.jp  
発行責任者：上坂 郁 編集長：原田 祥二

はリスク回避により、ドル/円とクロス円で短期調整的な全般円高と外貨安が後押しされる余地がある。

なお、為替相場のドル/円に影響を及ぼすのが、米10債金利の動向だ。前週は金利が上げ渋りとなったが、低下の度合いは抑制されている。週足テクニカルでは前週末時点で、13週、26週、52週の各移動平均線を全て上抜け維持している。同時にトレンド方向を示す各ラインの方向角度は、全て上向き化へと転換した状態だ。

米10年債金利が各移動平均線からの上抜け状態と上向き化が維持されている限り、ドル/円では「調整的なドル安が入っても、ドルの下限自体は切り上がり」というドル高基調の支援余地がある。その他の注目ポイントは以下の通り。

#### <週足、ドル/円は6週平均の維持焦点>

為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。ドル/円は3月24日週からドルの反発基調が続いているが、6月19日アジア市場時点のレート数値によると、「6週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンド」では、6週平均140.23円前後の上抜け維持が焦点になっている。

上下動を経ながらも、上抜け維持している限りは、ドルの下限切り上がり基調が継続。週間ベースのドル上値メドとしては、バンド上限143.10円前後やその上の方向が視界に入る。反対に6週線などを完全に下抜けると、ドルの上値の重さが確認され、バンド下限137.36円前後の方向へのドル安余地が意識されていく。

クロス円取引は3月24日週以降、外貨反発と円反落の基調が続いている。ユーロ/円、ポンド/円、スイス・フラン/円、カナダ・ドル/円、豪ドル/円、NZドル/円などでは、「5週や6週移動平均線の上抜け維持」が焦点になっている。上抜け維持の限り、引き続き外貨高の基調が持続。反対に3月以降の外貨高の反動調整などにより、各ラインなどを完全に下抜けると外貨安の基調入りが意識される。

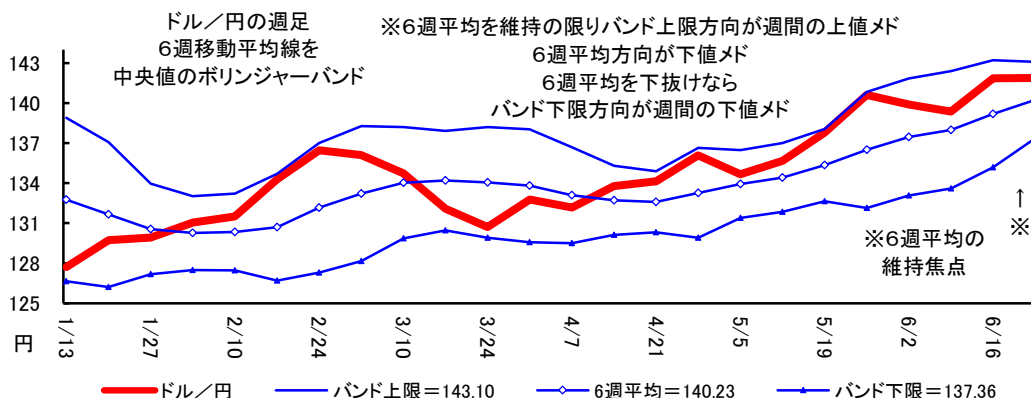
#### <米国の経済指標>

米国の経済指標は前週にかけて、強弱入り混じった結果が続いている。今週も打たれ強さが示されると、ドル高や円安が進展。反対に利上げ効果などで下振れとなれば、ドル安や円高という一喜一憂が想定されそうだ。

今週は20日の住宅着工件数や22日の新規失業保険申請件数、中古住宅販売などで、利上げや金利上昇の打撃などによる悪化が懸念される。一方で23日のPMIといった最新6月指標については、6月からの株高のほか、資源相場や各種物価の高騰緩和などが下支え要因となる。

#### <日本の物価指標>

日本では今週23日に5月の全国CPI（消費者物価指数）が予定されている。昨年からの値上げと価格転嫁の時間差波及のほか、4月の新年度入り以降の賃上げ実行などにより、CPIは高止まりとなる可能性がある。市場予想を上回ると、先



行き日銀による緩和修正の思惑を喚起。全般的な円高や、日本株の調整下落によるリスク回避の円高が警戒される。

前週16日には日銀政策会合後に会見した植田和男総裁が、「物価は、下がり方が思っていたよりもやや遅い」、「食料品・日用品・宿泊料などの価格が思っていたより高い」という見解を示していた。

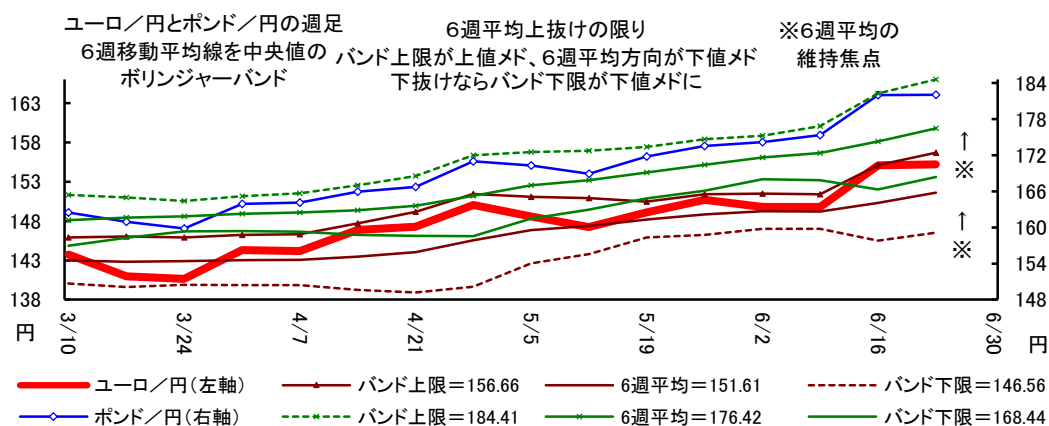
もっとも植田氏は「輸入物価はマイナス転化となり、物価引き上げの力は徐々に弱まる」、「今年度半ばに向けて、物価上昇率の上昇幅は縮小へ」とも発言していた。23日のCPIで実際に低下が確認されると、改めて当座の日銀緩和持続が意識されやすい。基調としての円安・株高の流れが維持されそうだ。

#### <英国中銀の政策委員会>

今週の英国市場では、22日に英国中銀が金融政策委員会を予定している。市場予想は0.25%の利上げ。21日には金融政策を左右する5月のCPI（消費者物価指数）も公表される。

ポンドはすでに利上げ継続を織り込む形で、前週に大きく上昇した。その意味で22日の会合前にかけてはポジション調整的なポンド安、22日に実際に0.25%の利上げとなった場合は「一旦の材料出尽くし」による短期的なポンド安が注視される。英国では16日、英国中銀が実施した調査として、消費者の1年先のインフレ期待が3.5%となり、2月時点の同3.9%から低下したことが明らかになっていた。

もっとも前週は欧州でECBが0.25%の追加利上げを決めるとともに、根強いインフレ上昇圧力への警戒感と利上げ継続の姿勢を示している。英国中銀についてもECBに追随する形で、インフレ警戒堅持と利上げ継続の姿勢を強くアピールしてくる可能性は無視できない。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。